## 紹介

### 愛媛県史編さん委員会編
### 『愛媛県史』資料編 古代・中世

今般待望の『愛媛県史』資料編 古代・中世が刊行された。伊予の中世史料といえば、往年『伊予史料集成』が刊行されているが、現在では全く入手不可能で、今回の編纂は研究者・学界にとっては大きな朗報である。おおむね地方公共団体の編纂史といえば、史料編中世は、九割がた室町・戦国時代の史料が占め、平安・鎌倉以前の史料は僅少というのが普通であるが、本県の中世史料は、実に鎌倉以前が四割近くを占める。それというのも、塩の荘園で有名な弓削島庄関係の文書が、鎌倉期を中心に大量に残存していることがその大きな一因である。その弓削島庄史料であるが、県史編纂に当って原本所蔵者の京都府立総合資料館の協力を得て逐一原本校合をとげられており、すでに先年出版された『日本塩業史大系』よりも一層正確な翻刻に努められている。その厳密な校訂姿勢に先づは敬意を表したい。忽那嶋文書、大三島神社文書（本巻では『三島家文書』として翻刻）が全文収載されているのも当然とはいえ有難い。

室町期の伊予は、水軍の本拠地として著名であるとともに、独特の守護職の分割が行なわれた国として特異な存在である。すなわち康暦の政変（一三七九年）以降、東予が細川氏、中予に宇都宮氏、南予が西園寺氏と、正守護河野氏以外に少くとも二人は別人の守護権をもつ知行者が存在していた。本巻編集協力者の石野弥栄氏らの研究によって従来からも知られてはいたが、今回の刊行によってその状況がさらに明確にされると考えられる。

本書の特色の一つに県内外編纂物所収文書、とくに守護大名河野氏関係の家譜・戦記類である『予章記』『築山本河野家譜』『予陽河野家譜』等から信憑性ありと認められた収載文書を大量に翻刻されたことがある。これは単に文書が伝来しているから編入したということではなく、諸本の異同と信頼性を綿密に検討し、伝本系路を丹念に精査された編集委員の山内譲氏の努力の成果である。氏は本県の生れ、弓削高校を振出しに県内高校教諭、県史編纂委員を勤める傍ら、弓削嶋庄の研究や河野氏の研究など伊予中世史に多くの業績をあげてこられた篤学の士で、同氏の研究成果ともいえる本書の刊行によって、今後の河野氏研究の礎がきづかれたことになる。長年の間、困難な研究条件のもとで孜々として地方史研究にささげてこられた山内氏らの業績に対し改めて敬意と慶賀を表したい。

若干の注文というか不満な点もある。芸予諸島の塩の生産については、これを数量的に把握しうる在地史料は極めて少なく、その点で林屋辰三郎氏が編集された『兵庫北関入船納帳』は稀有の史料と呼びうるものである。同納帳によって文安二年（一四四五）一年間に兵庫北関に入港した弓削嶋籍の船舶が積載していた備後塩は三、五一三石、同じく岩木嶋の船は九六五石、伯方嶋の船は八九〇石の塩を畿内に運送していたことが判明している。それだけに本書に『兵庫北関入船納帳』の伊予関係史料が収載されなかったのは、何か事情がおありだったのかは知らないが残念である。そういえば記録類（日記など）一切が省かれてい

るから、別途史料編を御予定かとも推察される。もしそうであれば、入船納帳も是非収めて欲しい。最後に花押一覧について、一六八号花押の政国を畠山政国と推定されているが如何であろうか。筆者の推定では、この形状が細川持賢や勝元の花押に類似していることから、この政国は持之の甥（勝元の従弟）で摂津欠郡守護の細川政国の判ではないかと思われる。管見の範囲では従来政国の花押直筆は殆んど知られていなかった（『和田文書』に収む）ので、一六八号の花押は貴重な史料と考えられる。また二四五号花押の常久を〃某〃とされているのは、有名な細川頼之が康暦の政変で出家して以後の法名である（小川信氏著『細川頼之』のグラビア写真地蔵院文書参照）から念のため。

（A5判　一一八七頁　目録別冊一五三頁
一九八三年三月　愛媛県　七〇〇〇円）

（今谷　明　国立歴史民俗博物館助教授）

## Alan R. H. Baker and Derek Gregory (eds.): Explorations in historical geography: Interpretative essays（歴史地理学における探究——解釈的試論集——）

最近のイギリス歴史地理学界の活発さは顕著である。本書は、斯界の代表的論者A. R. H. Baker と D. Gregory が編集の任にあたり、先述の動向を示す一つであるケンブリッジ歴史地理学研究叢書の第五巻である。

さて、本書は五つの試論的論考と対談記録の計六章から成る。まず、第一章では編者 Baker が「歴史地理学とアナール学派歴史学との関係に関する考察」と題し、一九八〇年国際地理学会議（於東京）での彼の報告（『歴史地理学プロシーディングス』、古今書院、一九八二）を予告通り敷衍している。最初に、周知のように最近注目を浴びているアナール学派歴史学が、ブラーシュ人文地理学の原理をより健全・忠実に学習・実践してきたのに対し、それを怠り、歴史学との交渉にも消極的だったフランス歴史地理学界が衰退を示したのは、一種のパラドックスだとする。このアナール学派歴史学と創始は同時期（一九三〇年頃）ではあるが、その成果を吸収せずにきたイギリス歴史地理学の発展のあとを辿る。地理学と歴史学とを区別させることを目標とし、実用主義的（pragmatic）であった創始者 H. C. Darby の伝統の上に立ちながら、一九六〇年代中葉頃から哲学の領域へ踏み込んでいく歴史地理学者が出る（D. Gregory, M. Billinge など）。Baker としては経済的なテーマとともに社会的テーマの追究も拒まない Darby の伝統を発展させ、人工物や行動とともに思想や態度、景観変化の動因としての人間を強調する傾向に注目する。そして、諸個人の様々な結びつきの網を復原し、社会集団の役割を評価する社会的な歴史地理学を提案し、その事例研究として一九世紀フランス農村をとりあげている。

第二章「ジョージ王時代後期・ビクトリア朝初期のイギリスにおけるヘゲモニー・階級・権力——文化地理学をめざして——」では Billinge が、本叢書第一巻『時代と場